

日嚴寺の建立について

花塚久義

日嚴寺は隋の煬帝が長安城内・芙蓉曲水（現在の曲江村）に建てた寺で、彦琮・吉藏・慧乘・智脱等数多くの名僧が住し、当時の仏教界に於て重要な役割を果たした寺である。その住僧等に関する一斑の考証は、山崎宏氏の『隋唐仏教史の研究』に見られるが、本稿では、特に建立年時を問題とする。というのも、この問題は、吉藏の長安入り、及び『浄名玄論』の選述年時に関係してくるからである。

これまで、日嚴寺の建立年時については、前掲『隋唐仏教史の研究』をはじめ、すべて『長安志』巻八の記載を典拠として論じてきたわけであるが、これによると、「西南隈廢日嚴寺。隋煬帝為晉王。仁寿元年施營第材木所造。因広招名僧以居之。貞觀六年廢。」とあって、日嚴寺の創建は仁寿元年（六〇一）のこととされる。一方、吉藏は『浄名玄論』において、

金陵沙門積吉藏。陪從大尉公晉王。至長安鼎芙蓉曲水日嚴精舍。……（中略）……著茲玄論。（大正藏二二八・八五三七）

と言ひ、更に『維摩義疏』にも、

余以好開皇之末。因於身疾。自著玄章。（大正藏三八・九〇八下）と述べて居り、彼が日嚴寺に入住して『浄名玄論』を選述したのは、開皇の末であるとしている。この吉藏の言を信ずれば、日嚴寺は開皇年間、已に創建されていたわけで、『長安志』の記載は誤り

とせねばならない。そこで、いま一度『長安志』の記載をふりかえつてみると、その内容にいさか問題のあることがわかる。すなわち、日嚴寺の創建を隋の煬帝が晉王たりし時と言ひ、仁寿元年と言ひのは、明らかに内容に齟齬が見られる。何となれば、仁寿元年に煬帝は皇太子となつて居り、已に晉王ではないからである。しかも『隋書』巻二帝紀第二を見ると、「仁寿元年春正月。河南王昭為晉王。」とあって、仁寿元年に晉王といへば、揚昭のことである。したがつて、『長安志』の記載のみをもつて、日嚴寺の創建年時を決定することは、やや早計に失する憾みがある。よつて、改めて関係記事を文献に徴すると、『唐高僧伝』に以下の如き資料が見出される。

煬帝時為晉王。於京師曲江宮第林。造日嚴寺。（大正藏五〇・四三七上）

煬帝昔為晉王。造寺京室。諸方搜選。（大正藏五〇・六七〇上）

ここには年時の記載は見られないが、両文ともに晉王の時と明言している。しかも前者「彦琮伝」の場合、宋・元・明三本では、「營第林」の上に「施」の文字があり、『長安志』の記載に酷似するのである。或いは『長安志』の著者宋敏求の拠つた資料は、この「彦琮伝」であつたかもしれない。仁寿元年の年号を付加したについては、おそらく「彦琮伝」に、日嚴寺建立に関して述べたのち、仁寿初年、彦琮が舍利を送る任にあつたことが記述されている点より、これを不容易に結びつけてしまったためと考えられる。なお「唐高僧伝」の著者道宣（五九六～六六七）は、「余もと京師曲江池の日嚴寺に住す」（『集神州三宝感通録』巻上・大正藏五二・四〇五下）と言ひように、日嚴寺に住したことがあり、また『宋高僧伝』の道宣伝にも、

泊十六落髮。所謂除結非欲染衣。便隸日嚴道場。弱冠極力護持專精（大正藏五〇・七九〇中）

とあって、創建後間もない頃、日嚴寺で修行していた人であることが知られる。実際、『唐高僧伝』中、日嚴寺乃至日嚴寺僧に関する言及はしばしばで、前後十九回を数える。このような点を考慮勘案すれば、道宣の日嚴寺に関する記述は相当信頼できるものであり、彼が煬帝の晋王の時と特にことわる以上、日嚴寺の創建は仁寿元年ではなく、開皇年間のことと見なすべきであろう。もし煬帝が皇太子の時であるならば、『唐高僧伝』巻九智脱伝の、

儲后親臨時為盛集。（大正藏五〇・四九九上）
という文や、『集神州三宝感通録』巻中「隋京師日嚴寺石影像縁三十八」の、

隋開皇十年煬帝鎮於揚越。……（中略）……後登儲式。（大正藏五二・四二一中）

といった文例から見て、「晋王」の代わりに、「儲」乃至「儲式」の文字が用いられたに違いないのである。

では、一体いつごろ日嚴寺は建立されたのか。煬帝が晋王であったのは開皇年間（五八一～六〇〇）で、二〇年の長きにわたるが、その大部分は江南に鎮して、長安とは縁もろく、寺院を造営するほどの長期滞在もなかったであろうから、やはり開皇の末、吉蔵を従えて長安入りして後のことと思われる。その間の煬帝の動向を、『隋書』に探ると、巻二帝紀第二に、「（開皇十九年）二月己亥晋王広来朝。」の記事が見え、おそらくはこの時、吉蔵も長安入りしたのである。そのことは吉蔵と同じく、揚州慧日道場より煬帝に従って長安入りし、日嚴寺に住した智矩について、『唐高僧伝』が、

日嚴寺の建立について（花塚）

開皇十九年更移闕壤。勅住京都之日嚴寺。供由晋国。（大正藏五〇・五〇九下）

と述べていることからもうかがえよう。すなわち、日嚴寺の建立は、煬帝が長安入りした開皇十九年二月より、煬帝が皇太子となる開皇二〇年十一月までの間に求められるのである。

因みに日嚴寺の廃絶年時についても、『長安志』の記載と道宣の記すところとは相違があり、「長安志」は貞観六年（六三二）とし、道宣は武徳七年（六二四）としている。いずれにしてもその存立期間は、わずかに二、三〇年足らずで短い。一時は名徳五〇人が住したとされる大寺院にして、この短命さは異様である。その廃するにあたっては、何か特別の事由があったと考えるのが妥当であろう。

その点、『全唐文』巻三、高祖の「沙汰仏道詔」を見ると、「京城留寺三所。観二所。其余天下諸州各留一所。余悉罷之。」とあって、高祖代、すなわち武徳年間に、寺観を規制する詔が下り、都長安城内には仏寺三所、道観二所と限定されたことがわかり、日嚴寺の短命さもうなづける。同時にまた、道宣の言ひ武徳七年廃絶の説も積極的に支持されるのである。

以上、日嚴寺に関する『長安志』の記載の信憑し難いことを論じ、加えて日嚴寺の住僧であった道宣の記載に基き、新たにその廃置年時を策定した。なお、日嚴寺については、その建立の目的や事情、住僧の性格、当時の仏教界に果たした役割、更には吉蔵の動向と関連して、論及すべき点も種々存するが、いま詳しく論ずる暇もないので、これらの考証は別の機会に譲ることとしたい。

〔詳註省略〕

（駒沢大学大学院）